

中高年の女性の「膝の痛み」に再生医療という選択肢

加齢によって膝軟骨がすり減ることによって起きる「変形性膝関節症」の患者が増えてくる。この新たな治療法として注目されているのが、自分の血液を使った「再生医療」だ。長年膝の治療に取り組んできた整形外科の先生にその内容や効果を聞いた。



清水 長司 先生
宇治武田病院 副院長

<プロフィール>
1988年京都府立医科大学整形外科入局 1994年～1996年 カリフォルニア大学 サンディエゴ校 留学(研究員) 2004年～現在に至る 2004年 京都府立医科大学客員講師、宇治武田病院 整形外科 資格:1997年 日本整形外科学会専門医、2004年 日本リハビリテーション医学会専門医、2008年 日本スポーツ協会公認スポーツドクター

変形性膝関節症の治療に期待
新たな選択肢「APS療法」とは
年齢とともに膝の痛みが悩む人は増えますが、原因として多い疾患が「変形性膝関節症」です。関節の軟骨が加齢とともにすり減り、炎症が起きることで強い痛みが生じます。立ち上がり、歩き始め、階段の昇り降り、痛みや違和感がある場合は、一度整形外科を受診してご自身の膝の状態をみてもらうことをお勧めします。

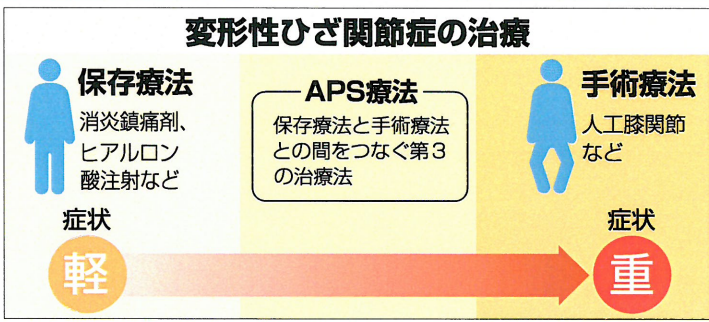


変形性膝関節症の症状の一例

初期なら痛み止めの投与、ヒアルロン酸の注射、筋力トレーニングといった「保存療法」で痛みを和らげることができですが、それだけでは改善しない場合や、重症化して骨の変形が進んでいる場合は「骨切り術」や「人工膝関節置換術」などの「手術療法」を検討します。これまで変形性膝関節症の治療といえば、大きく分けてこの2つでしたが、近年、この両者の間に「再生医療」という新たな選択肢が加わりました。簡単にいうと、人間の体にもともと備わっている自己修復能力を使う治療法です。再生医療にもさまざまなものがありますが、整形外科で行う代表的な治療に、患者さん自身の血液を使う「PRP療法」「APS療法」があります。

血小板には傷ついた組織を修復する働きがあり、スポーツでのケガなどによる靭帯や腱の治療に取り入れられています。さらに、PRP療法をより進化させたのが「APS療法」です。これは、PRPをさらに遠心分離にかけて、炎症を抑えるタンパク質を高濃度に抽出したAPS (Autologous Protein Solution) 自己タンパク質溶液)を注射する方法です。炎症を抑える効果が期待できることから変形性膝関節症の新たな治療選択肢として注目されています。

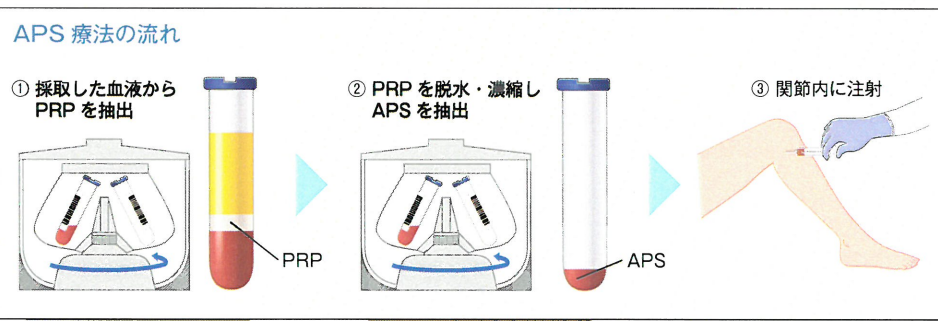
これらの治療は「再生医療等安全性確保法」という法律に基づいて国から承認された医療機関でしか受けることができません。また保険適応外の自由診療のため治療費は施設ごとに異なります。治療をするにあたり年齢制限などはありませんが、重篤な持病をお持ちであったり関節リウマチなどの膠原病や膝の変形が高度で骨髄浮腫が著しい場合は治療を受けられない場合もあります。



「専門医と十分に相談し、納得した上で治療」
APS療法は採血から注射まで1時間ぐらいいで済み、入院は不要です。治療後は一時的に痛みや腫れが出る場合もありますが、多くの場合数日で和らいでいきます。

ですのでそれまでは安静にするようにしましょう。ご自身の血液を使うため副作用の心配もほぼなく、安全性の高い治療法といえます。早いケースでは治療後数週間で痛みが軽減されている人もいらつやいます。

ただし、血液状態や変形の程度は人それぞれのため治療効果には個人差があります。また、これは誤解されやすい点ですが、この治療ですり減った軟骨が再生することはありません。あくまで炎症を抑えることで痛み軽減が期待できる治療であるということを認識しておいてほしいと思います。



保存療法を続けたけれどもなかなか改善しない人や持病をお持ちで手術を受けられない人、仕事や介護などの事情ですぐに手術するのが難しいという人にとっては、APS療法は有望な選択肢といえるのではないのでしょうか。とはいえ、保険適応外の治療であることや効果には個人差があるなど、判断が難しいと思われるかもしれません。大切なのは、痛みをそのままにせず専門医にAPS療法を含めた様々な治療法について説明を聞いてみることです。疑問や不安なことを何でも相談することで納得してご自身にあった治療を進めることができます。